



**我々日本人は、世界へ「もの、こと、
考え」を伝えるための「文明日本語」
を第2母語として、持つ必要がある。**

NIPTA理事
日本アイアール株式会社
代表取締役 矢間 伸次

特許明細書は発明技術の説明書である。技術は、まさしく文明である。文明言語であれば文化と民族は異なっても、物を観る方法、考える方法、原理、技術、社会の仕組み、法制、システムなどを世界へ伝えることができる。

情感として何らかの感動を与える文章の世界ではなく、伝えたい事実を正確に理解してもらう目的の文章は、正確さが第一である。世界の人々に何ごとかを正確に誤解なく伝えるためには、好むと好まざるに関わらず、論理的に明快に記述する必要がある。我々日本人は、この世界の共通事項を誤解なく伝えるため、もう一つの日本語を持つことが必要である。それが第二母語としての「文明日本語」である。

例えば、科学技術の世界において、電気の流れは民族と文化に関係なく、どこにおいても同じ原理で流れるわけだから、どれくらいの容量の電気が、どこで生まれ、何を通して、どこからどこへ、どのようなタイミングで、何のために流されているのかは、英語でも日本語でも正確に同じに記述できる。違いは、使われる文字と、記述の順序と、言葉(単語)だけであり、これらは問題なくそれぞれの言語に転換できるはずである。

日本では「特許英語」は難しい、という観念が行き渡っているように見受けられるが、英語に翻訳するのが難しいのは、原本である日本語で書かれた「日本特許明細書」の記述を「読み取る」ことにある。これは確かに「難しい」。「日本特許明細書」を「米国特許明細書」に翻訳する難しさは、英語にあるのではなく、日本語の「読解」が難しいところにある。

翻訳者のエネルギーの多くが、この「読解」

にあてられている。日本語を母語としている日本人翻訳者が、その日本語の「読解」に苦勞しているのが現状である。「日本特許明細書」に書かれている日本語が意味不明のものであれば、どんなに翻訳者の腕がよくても明快な英語に翻訳することは難しい。

権威者が、翻訳者は、非論理的でかつ必要要素の記述が欠けている原文(日本語文章)からでも、できるだけ論理的に整合のとれた英語文章に仕立て上げるのも仕事の一つ、という意味のことを、あるニューズレターに書いておられる。

翻訳者として、できるだけ品質の高い生産物を提供しようとされているその姿勢には敬意を表したいが、私は、上記のような改善行為は翻訳の範囲を超えていると考える。

翻訳という作業において、記述されている内容を、翻訳者が勝手に修正して転換することは、翻訳という本質からみて、許されることではない。原本の日本語文章が意味不明であれば、どんなに良心的な、仕事への責任感の強い、また高い外国語能力を誇る翻訳者でも、外国語に翻訳することは不可能である。翻訳者に翻訳能力が無いのではなく翻訳ができない日本語文章であることを依頼者へ勇気を持って訴えるべきである。

上記の特許翻訳の権威者の発言は、プロの翻訳者としての志の高さには感服するが、翻訳を依頼する側がこの発言に甘えて、相変わらず、意味不明の文章の翻訳を発注し続けるのであれば、事態は一向に改善されないままに終わってしまう。

(共同執筆：篠原泰正)